報告者：桑山　昭

「エチオピア　バハル・ダール市の福祉財団チェシャへの贈呈式報告」

エチオピアへの子ども用車椅子 90 台の贈呈式は、アジス・アベバから北北西に 350 ㎞離れたバハル・ダール市にあるチェシャ財団の拠点施設で開催されました。（２０１８年７月１８日）

バハル・ダール(アムハラ語：ባሕር ዳር)はエチオピア北西部のアムハラ州の州都である。 青ナイル川の源流のタナ湖の南岸に位置する。 2002 年には UNESCO の平和都市賞を受賞している。首都アディス・アベバから約 578km 北北西に位置していて、飛行機で約 1 時間の距離にある。2015 年の人口は 24 万 3300 人である。（ウイキペディアから）

チェシャバハル・ダール支部の入り口と内部の建物です。すべてチェシャ財団の所有です。一部の土地や建物をレンタルしてその使用料金で収益を得て活動資金に充てているとのことです。写真右の建物の部屋で贈呈式が始まりました。

（写真左）チェシャのバハル・ダールのプロジェクトマネージャー　モハンマド氏の司会で贈呈式が開始されました。かなり長いスピーチがあり、会場の参加者に訴えている様子だったが、現地語だけだったので内容は不明です。

（写真右）会場の部屋があまり広くないので集まった親子の一部が会場に入っていました。中に入れない人は会場の外で待っている状態です。チェシャによると子どもの人数は５０人程度であるとのこと。

現場にはエチオピアのマスコミ（ＴＶ）も入って、取材していました。

会場に入りきれない子どもや家族は外で車椅子が渡されるのを待っています。チェシャスタッフがその人たちをケアしています。

会場内にはコーヒーやポップコーン、パンなどが準備されます。式の途中で会場の全員に配られました。パンはケーキカットならぬパンカットの後に配られました。

（写真左）エグゼクティブ・ディレクターのカディール氏が挨拶。これも現地語だけだったので、内容は不明です。
（写真右）英語版の「森田会長からのメッセージ」を現地語に訳して会場に伝えてくれました。

下記が森田会長メッセージの要約です。

・チェシャ財団および日本大使館の協力を得て、エチオピアにおける今回の贈呈式を開催できて嬉しい
・エチオピアへの贈呈は５回目となり、バハル・ダールの子どもたちに９０台が届いた。外務省の支援を受け２０１１年より届けた車椅子の総数は５２０台となった。
・車椅子を使ってよい姿勢を保つことで心身両面が改善される。親は子どもの面倒を見ることから解放され、自身も社会と関わったり仕事に出ることができるようになる。
・子どもたちは行動範囲が広がり、地域社会との関わりが生まれる。地域社会はこうした子どもたちの存在に気づき、子どもたちとの絆ができていく。
・車椅子は、タイヤの空気圧、ブレーキのチェックなど　メンテナンスを日常的に行うことが重要だ。大切に使って欲しい。また、使っている車椅子が小さくなってしまったら、　それを必要とする別の子どもにチェシャを通じて渡して欲しい。
・私たちのプロジェクトが貴国の子どもたちとそのコミュニティに大きく貢献すること、また、貴国と日本のさらなる友好関係を促進する新たなランドマークとなることを祈念しております。

２０１８年7月１８日　森田　祐和

（写真左）パワーポイントを使い、当会の活動を紹介しました。英語での説明を現地語に訳して会場に伝えてくれました。
（写真右）熱心に当方の説明を聞いてくれました。私語をすることもなく静かに聞いてくれました。エチオピア人の国民性を感じました。

日本大使館からは板倉二等書記官が贈呈式に臨席してくれました。
　以下は板倉書記官のメッセージです。実際には英語のスピーチでしたのでエグゼクティブ・ディレクターのカディール氏が現地語に訳して会場に伝えてくれました。ご当人が日本語に訳してくれましたので、下記に掲載します。

　この度、「チェシャ財団を通じて子ども用車いすを送るプロジェクト」の引き渡し式を海外に子ども用車椅子を送る会と共同にて発表できますこと大変光栄に思っております。
　本プロジェクトは，「海外に子ども用車いすを送る会」のイニシアチブにより、障がいのある子どもたちが自立し、職場や学校へのアクセス確保すること、そして精神・肉体的な状況を改善しサポートすることを目的にして実施されていると伺っております。これは、障がいをもった子どもたちに同じ機会を提供すること、地域コミュニティにおけるかれらのポテンシャルを生かすことに貢献すると確信しております。「海外に子ども用車いすを送る会」は，2013 年よりエチオピアにて活動を開始され，チェシェ財団と協力し、５２０台の車いすを提供しておられます。これらの活動により、多くの若者の生活を変えてきたと確信しております。車椅子を受け取られた皆さんが、よく使用し、よく手入れをされ、彼らの生活がより輝くことを希望します。
　最後に、プロジェクトを通じてチェシェ財団及び「海外に子ども用車いすを送る会」のみなさまのオーナーシップとパートナーシップに謝意と敬意を表すると共に、本プロジェクトがバハル・ダール市民に裨益し、二国間の良き友好関係の象徴となりますよう祈念いたします。

在エチオピア日本大使館　二等書記官　板倉純子

代表の子どもにチェシャ、日本大使館、当会からとして車椅子を送りました。

（写真左）車椅子の贈呈が終わるとセレモニーが始まりました。パンカットです。エチオピアではお祝いの席でパンカットをするそうです。小生はカットをする栄誉を担いました。
（写真右）そのパンと前もって用意されていたポップコーンとコーヒーが配られ、贈呈式をみんなで祝いました。

（写真左）贈呈式のクロージングの挨拶をする社会労働福祉局のアレムネ・モラ氏。以下はその要旨。
「局を代表してまず日本の皆様にお礼を申し上げる。子どもたちの活動は車椅子が無いとできないことばかりだが、日本から来た車椅子がそれを可能にしてくれる。車椅子を大切に使って欲しい。今後も、困ったことがあればチェシャや当局に連絡をしてほしい。」
（写真右）静かに耳を傾ける出席者。

（写真左）贈呈式終了後に会場の子どもたちに鉛筆セットとお菓子を配りました。
（写真右）クロージング挨拶をした社会労働福祉局のアレムネ・モラ氏が真っ先にＴＶ局のインタビューを受けていました。

（写真左）板倉書記官とＴＶインタビューを受ける筆者。「なんのためにこの活動をしているのか。お金がもらえるのか」の質問に「お金はもらえない。障がいのある世界の子どもたちに何かをしたかった。これが我々にできることだった。」と回答しました。（英語だったのでそう伝わったかどうか不明です）
（写真右）同じくＴＶインタビューを受けるバハル・ダールのプロジェクトマネージャーのモハメッド氏。

贈呈式終了後、倉庫に移動し子どもたちの体に合わせた車椅子を選び手渡します。車椅子がチェシャに届いたのは前日だったために、事前の車椅子割り当てが間に合わず、当日の会場での選定となりました。

開梱と同時に子どもに乗せてみます。チェシャのスタッフが手伝います。当日会場に来た人たちが、思い思いに子どもに合う車椅子を探しました。

以上